病院図書室　14(2):72-75, 1994

事例報告会抄録（1994.3. 於 淀川キリスト教病院）

徳洲会病院相互の文献貸借

宇治徳洲会病院図書室　　大久保　緑

徳洲会病院相互の文献貸借は、以前より近畿病院図書室協議会の目録をもとにして行われている。当院には主として近隣の八尾、岸和田からの依頼が多く、その他福岡からも依頼を受けていた。

平成5年4月より、製薬会社の文献サービスが廃止され件数が多少増加してきている。一方、福岡からの依頼が全くなくなったので、その理由について問い合わせた。福岡では図書室専任が1名、医局秘書2名で業務を行っており、相互貸借業務は医局秘書の仕事となっている。製薬会社の文献サービスが廃止されてからの文献検索および複写の費用はすべて公費でまかなわれているため、依頼件数は非常に多いとのことであった。現在、依頼している相手先は大学図書館をはじめ、近畿病院図書室協議会加盟図書室である。当院に依頼をしなくなった理由は、件数が多いため医局秘書と図書室担当者が兼任のところへ依頼すると、相手方の負担が大きくなると考えたためであった。したがって、主として図書室に専任者がいるところへ依頼しているが、病院によっては専任者が配置されていても相互貸借業務を行っていないところもあるということであった。

徳洲会病院の一例として、福岡の状況を述べたが、他の徳洲会病院でもほぼ同様な問題をもっているのではないだろうか。そこで、今計画をしているのが、関西地区徳洲会病院（野崎、徳田、岸和田、八尾、神戸、宇治）6病院の医学雑誌目録の作成と分担保存である。分担保存はスペースの問題がありまだ考慮中ではあるが、目録作成はより容易に取り組むことができそうである。目録を作ることによって相互貸借業務がより円滑にスムーズに行えるようになればと思っている。

最後に、文献検索については平成5年8月から徳洲会大阪本部でCD-ROM（医学中央雑誌、Medline)検索がしてもらえるようになった。この検索費用は無料であるが、データが過去5年間と少ないこともあり、検索結果が乏しいという医師からの意見が多いのが現状である。

入会後1年間を振り返って

関西労災病院図書室　　寺澤　裕子

当院が協議会に入会してから約1年が経過したので、いくつかの点についてまとめてみた。

［文献相互貸借数］

相互貸借件数は3月14日現在で申込件数43件、受付件数27件である。担当者の入職とほぼ同時期に協議会に入会したため以前との比較はできないが、現在すこしづつ増えてきている。ただし、利用者より複写を依頼される文献は協議会内で入手できないものも多く、京都南病院に所在調査をお願いすることが多い。

［MEDLINE CD-PLUS の導入］

昨年秋に医学文献検索システムを導入した。たいへん便利で、これの導入により文献複写の依頼も増加してきている。

医学中央雑誌CD-ROM版を IBMで使える辞書（DOS/V版の日本語辞書）が今年の夏発売されるそうで、そうなれば医中誌のCD-ROMも現在使っているハードで利用できることになる。詳しいことは不明なのでご存知の方がいらっしゃれば教えて欲しいと思う。

［図書・雑誌の管理］

現在、ほとんどの図書室では分類番号で図書の整理が行われているが、病院図書室で分類を使って本を探す人はほとんどいないのではないだろうか。私が今までに利用した図書館ではパソコン端末を使って書名や著者名から読みたい本を検索できるようになっている。将来はこのようなシステムを取り入れたい。

ちなみに発表当日、参加病院の状況を聞いたところ以下のとおりであった。28図書室中パソコン管理をしているところ5施設。

［例1］蔵書3000冊の図書室
パソコン管理しているのは図書館業務をスムーズにすすめるため。検索にも利用するが担当者不在時にはあまり利用していない。

［例2］蔵書15,000冊の図書室
人が覚えられる冊数を超えているのでパソコン管理はよい方法だと思う。ソフトを購入し、データ入力中。

［新聞検索G-SEARCH］

パソコン通信などで新聞記事データベースの検索ができると聞き問い合わせた。キーワードをたくさん準備しなければならないが、有料でコピーを送ってもらえるようだ。

最後に当院への文献複写申込について触れておきたい。当院へ FAXで文献申込をされる場合、図書室外に FAXが設置されているため、午前中か、もしくは午後であれば送信の連絡をいただければ当日中に発送可能。また、領収書の有無を明記のこと。

図書室に勤務するようになって間がないためまだまだ不十分ではあるが、「図書を必要とする人の役にたつことがいちばん大切である」というあたりまえの、しかし大切な言葉を忘れないようにしたいと思う。

看護図書館協議会の紹介

日本赤十字愛知女子短期大学図書館
林　志穂

1．看護図書館協議会概要

医学図書館協会や、病院図書館協議会は存在するものの、看護系の図書館の入るべき協議会がないという状況の中で1991年8月、日本看護協会図書館と聖路加看護大学図書館の司書、教職員が集まり、発起人会が行われた。そして、1991年12月、看護学・医療の進歩、発展のために寄与する事を目的として、看護図書館協議会が正式に発足した。目標は、「看護情報の流通をはかり、司書の資質向上をめざすこと」と掲げた。そして、関東地区、続いて、全国の看護系大学・短大へ入会申込書を送付し、現在会員数は、団体33、個人23名、賛助会員4社、合計60である。

2．活動内容

主な活動内容としては、総会（年1回）、研究会（年3回）、会報作成（年4回）、研究グループ活動、目録作成等である。

そのうち既に行われた研究会の内容について簡単に報告する。

(1) 研究会の内容

a. 第一回研究会「相互協力」

協議会で雑誌目録を作成することで意見が一致し、データ提出の方法は、基本的にはMS-DOSテキストファイル形式で、フロッピーで提出する事が決定した。また、目録の類は、既に学術情報センターを中心に集約されていく傾向にある為、この目録のデータ掲載方法も、学術雑誌総合目録に準じたかたちをとることと決まり、早速データ提出の案内が各館に配られ、準備がすすめられた。

b. 第二回研究会「相互協力」

雑誌総合目録作成準備が進み、次に相互協力をいかにスムーズに行っていくかという問題が生じる。そのためにも、相互利用マニュアルを作成する事が決定し、後日、書誌事項の記載方法などが書かれたマニュアルが各館

へ送付される運びとなった。

c. 第三回研究会「看護学分類」

協議会で以前行った調査によると、NLMC、NDC 、LC、看護協会図書室分類法、或いは独自で作成した分類表の中からいくつかを組み合わせて使っている館が多く、全体的には、あまり統一がとれていないという現状である。どの分類表を使うにしても、国内でも中心的な機関が看護学の分類表を責任をもって管理していくべきであろう。ちなみに、当協議会では、NDC9版改訂に向けて、「492.9 看護学」を展開して看護分類を提示し、申請しようとする動きがあり、案が打ち出されている。これがNDC9版で採用されるのであれば、看護系図書館あるいは看護学図書を多く所蔵する図書館では、NDC一本で管理をする図書館も出てくることと思われる。

d. 第四回研究会「利用者教育」

利用者教育を行っている図書館から、事例報告がなされた。発表を行った図書館では、新入生向けに4月にオリエンテーションをし、2年生へは、授業数2コマを使い、文献検索指導を行っている。授業では文献を使って研究をしていく意味を説明し、実際の方法を体験させており、この結果、実際の実習などで文献が必要な時にも積極的な利用が見られるようになった、という報告がなされた。

e. 第五回研究会「ネットワーク」

f. 第六回研究会「コアジャーナル」

図書館分館を新設する際に、どういった基準で雑誌の選択を行ったか、という事例報告や、看護雑誌総合目録に見られるコアジャーナルについての発表が行われた。限られた予算とスペースの中で所蔵すべき雑誌を決定することは、なかなか困難な事ではあるが、論文中での引用回数や利用者の利用回数、或いはアンケート等による希望を基に、各館で何らかの方針を打ち出し、それに基づいて雑誌の選定を行い、年に一度は再検討の機会を設けるのが望ましいだろう。

(2) 看護雑誌総合目録

協議会で看護雑誌総合目録を作成した。データ掲載方法は、学情方式に準拠しており、タイトル数は和雑誌1845、洋雑誌 497、制作部数は 200部である。各館の受付様式等の付いた相互貸借便覧も掲載されている。

報告：日本医学図書館協会加盟館に対する「Faxによる文献複写依頼」アンケートの実施

西淀病院図書室　　前田　元也

日本医学図書館協会(JMLA)加盟館に対してFaxによる相互貸借の申込の可否、申込にあたっての注意事項、申込様式、病院図書室への要望の4点に関する調査を行ったので、その概要を報告する。

（詳細は本誌14巻1号pp.7～17. 参照のこと）

【 Faxでの申込受付の可否】

回答のあった81館中受付可・条件付きで可としたものはそれぞれ57館(70.4%) 、15館(18.5%) で合計72館。全体の88.9%であった。受付不可は9館てで全体の約11.1%であった。

【条件付き受付可能な図書館】

15館が出している条件を概括すると（依頼の際の記載内容明記等、事務的な問題以外の条件)、もっとも多いのが依頼図書室のある地区内での処理で9館。件数の制限が4館。緊急時のみ受け付ける図書館が2館。その図書館にのみ所蔵している資料は複写を受け付ける館が1館。その他2館となっている。15館中の半数以上の9館が地区内の処理を希望、または限定しているのが特徴的である。

【文献複写申込にあたっての注意事項】

1. 宛名（返信用）ラベルを添付する　11館
2. 申込書に申込館の Fax番号、電話番号を記入する　7館
3. 表紙(Fax送信案内書) 不要　4館
4. 申込者、担当者のフルネームを記入する　2館

5．相互貸借用紙の大きさを指定　2館
6．申込書、通知書が各1部必要　2館
7．欧文はタイプ打ちで　1館
8．図書館宛明記のこと(Fax館外設置のため)　1館
9．1枚に1文献記入　1館

Faxで文献複写を申し込む際に病院図書室が特に心掛けるべき点は、まず宛名ラベルの添付がある。ラベルは切り取ってすぐに使用できるもので、なかには前もって送付してほしいと回答してきた図書館もあった。次に依頼図書室の Fax番号、および電話番号を申込書へ記入すること。謝絶の連絡や書誌事項、その他の問い合わせを迅速に行うためにもやはり必要である。3つめは Fax送信案内であるが、これは送る側にも手間がかかることで、特別な要件がない限り必要なしと考える。4つめは申込者、担当者のフルネームの記載である。料金の請求や諸手続き上必要である。その他上記の項目を参照のこと。

【申込様式】
1．必要な書誌事項が記載されていれば専用様式にかぎらない
　36館(50%)
2．専用様式での申込のみ受け付ける
　10館(13.9%)
3．JMLA様式を使用、またはそれに準ずる
　21館(29.2%)
4．不明・未記入
　5館 (6.2%)

【病院図書室への要望】
最も多かったのは「書誌事項の正確な記載」で11件。また、「所蔵確認を正確に」が5件あった。これらはどちらも基本的な事柄なので注意したい。その他、本誌前号に掲載の表で各図書館ごとに参照されたい。

Faxによる文献複写依頼は今後ハガキにかわって利用が多くなると思われる。今回の調査が参考になれば幸いである。

CD－ROM文献検索と利用者

国立京都病院　小田中　徹也

CD-ROMによって利用者が直接MEDLINE の文献検索をする場合、利用者記録を残しておくことは資料の利用動向を知る上でも、コンピューターのハードやソフトの管理の上でも有用と思われる。当院で作成した利用記録の方法については、既に本誌14巻1号1994年で紹介した。

これは検索ソフトの起動前にデータベースの汎用ソフトを起動するようバッチファイルに登録しておく方法を用いている。また、dBASE やdBXLなどでは画面表示や処理のプログラムを作成しておけば、ユーザー・インターフェイス上での利用者の負担も少なく、また蓄積されたデータの処理も容易である。このプログラムを提供した他の数施設も現在、問題なく動き活用されているとのことである。

次に、パソコンは今や病院図書室では必備の機器となり、機種もIBM 系統の PC-AT互換機、PC-98 シリーズ、Macintosh など多様化している。これらの異機種間でもデータは相互に転送・利用することができる。そこで、図書館が持つ膨大なデータをより手近で迅速に個人レベルでアクセスする例としてEndNote Plus がある。

MEDLINE の検索結果のデータは、印刷だけでなくテキストデータとしてファイルに転送し、利用者独自のデータファイルとしている場合が多い。図書室での MEDLINE(CD-ROM)は一般的にMS-DOS上で動いているが、最近これを上記の市販ソフトによって Macintosh上で個人的な文献書誌データベースとして利用する医師が増えている。

パソコンは文字どおり急速にパーソナル化しているが、文献書誌などの大量のデータも範囲を絞ってエンドユーザーの手元におく時代となった。病院図書室はこれまでのように一次情報を提供するだけでなく、二次情報の加工と提供も必要な役割になっていくと思われる。